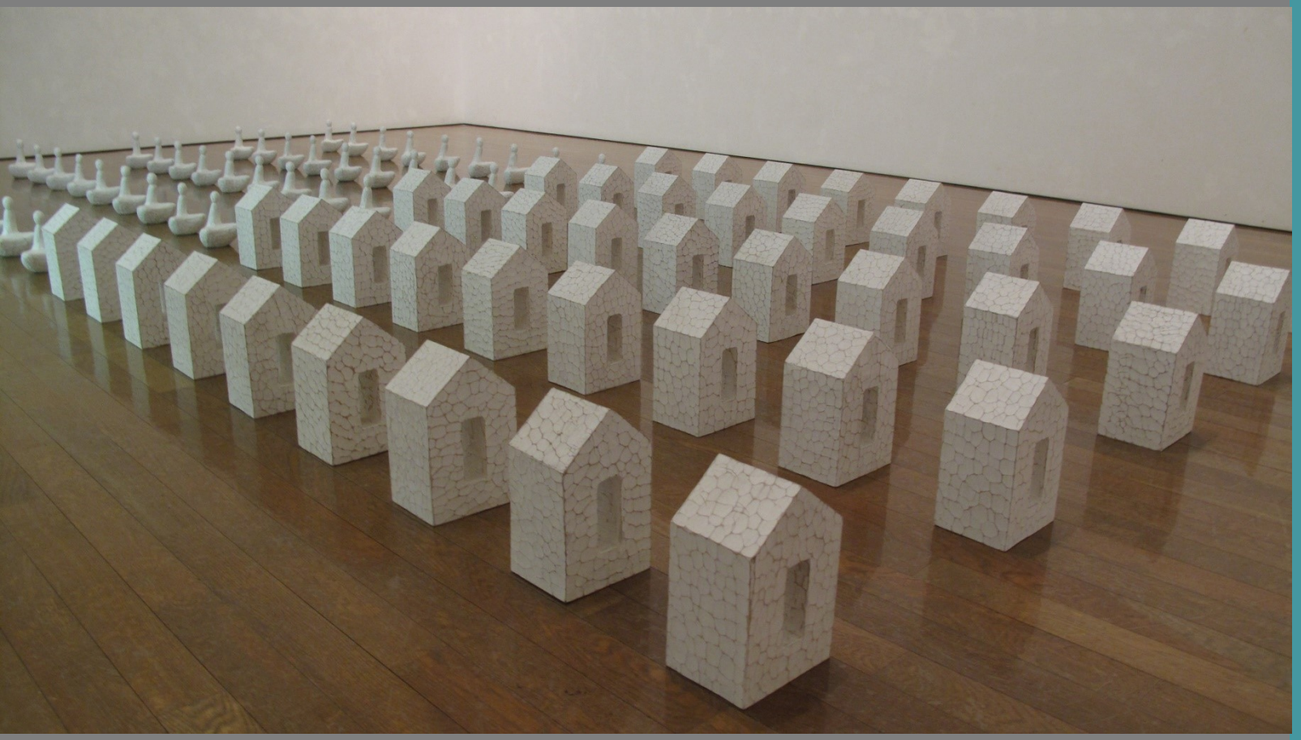
出品作家：
大島愛(招待、広島市)／尾崎公彦(招待、倉敷市)／高地秀明（福山市）／才田博之（東広島市）／椎木剛（府中町）／渋谷清（福山市）／千田禅（呉市）／田川久美子（広島市）／並木貴子（福山市）／根木達展（東広島市）／橋野仁史(福山市)／范叔如（広島市）／広田和典（福山市）／船田奇岑（広島市）／薮野圭一（倉敷市）

Artists:
Ai Oshima, Kimihiko Ozaki, Hideaki Kochi, Hiroyuki Saida,Tsuyoshi Shiinoki, Kiyoshi Shibuya, Shizuka Chida, Kumiko Tagawa, Takako Namiki, Satonobu Negi, Hitoshi Hashino, Fan Shuru, Kazunori Hirota, Kishin Funada, Keiichi Yabuno



Kimihiko Ozaki　　尾崎公彦《ニュータウン》（2005～）《坐るかたち》（2016～）

「高度経済成長期に、全国各地で開発されたニュータウン。現在のニュータウンは、住民の高齢化・単身化による、社会的孤立や空き家など放置できない社会問題がある。作品を通して、これからの社会のあり方や人と人の関わり方について、考える契機になればと思っている。」

　このところの夏は、命に危険なほどの暑さだし、雨の降り方も激しいゲリラ豪雨で、とにかく異常なことをひしひしと感じざるをえません。これまで地球温暖化とか気候変動とか言われ、北極の氷が崩壊する場面や、沈みゆくツバルの島の映像がテレビに映っていても、なぜか現実味がなかったが、昨年夏の西日本豪雨による広島県内をはじめ岡山県などでの甚大な被害は、私たちにその現実を見せつける格好となってしまいました。私の住む福山市内でも水没したり溜池が決壊したりして亡くなる人まで出ました。広島市や呉市、東広島市などでの被災状況には目を覆いたくなったし、ましてや倉敷市真備町の河川氾濫による家屋浸水の被害の甚大さ、亡くなられた方々の無念さに胸が痛んでしまいました。被災された方々は、その復旧復興に今も苦労しています。
　私たちは何をしたらよいのでしょうか。復旧ボランティアに参加したり、募金に応じたり、あるいは個人でできる地球温暖化の対策をしたりとそれぞれが実践していくことは重要だと思います。もうひとつは、その問題についてよく考えてみることも必要だと思います。
　かつての高度成長期に、大気汚染や水質汚濁、自然破壊といったいわゆる公害問題を私たちは経験しました。住民運動や公害反対運動が盛んとなり、企業や地方公共団体、国も公害防止に取り組むようになりました。公害問題を考える論考や出版も多く出されました。美術においても、「人間と物質」や「人間と自然」をテーマとした展覧会が開かれました。
　私たち広島芸術学会は、「市民に開かれた学会」をモットーとして、1987年に設立され、1996年以来、会員の美術作家たちを中心に毎回新しいテーマの「芸術展示」を隔年開催してきています。本年の第11回展開催にあたり、私たちはもう一度人間と自然の関係を考えることとし、「再考！人間と自然」をテーマとすることとしました。私たちに迫りくる異常な事態を、芸術的な感性で独自にとらえ、それを再解釈して芸術表現として発信していく機会としていきたいと考えたわけです。
　本展において、「人間と自然」をテーマに15名の作家たちがそれぞれ感じていたこと、考えていたこと、想像していたことについて、様々な手法で表現したものを展示をいたします。そうした作品群を幅広い方々にご覧ただき、「人間と自然」の関係をもう一度考える機会としていただければと思っています。

広島芸術学会（芸術展示担当委員　谷藤史彦）

広島芸術学会　芸術展示〈制作と思考〉　第11回展

再考！人間と自然

reconsider the relationship between man and nature

「自分よりも遅いものや静かなものに対して、もう少し譲ってみることでもっとうまくいくのかもしれない。」

Ai Oshima　　大島愛《負けてしまえばいいのにと思った》(2009)

2019年3月5日（火）-3月10日（日）　9:00～17:00　観覧無料

主催/広島芸術学会　https://home.hiroshima-u.ac.jp/hirogei/
Organized by Hiroshima Society for Science of Arts

アーティスト・トーク「自作を語る」
3月10日（日）14:00～

Hiroshima Prefectural Art Museum
広島県立美術館
県民ギャラリー
広島市中区上幟町2-22　Tel. 082-221-6246

Kiyoshi Shibuya　渋谷清《Between》（2018）

「降りてくる光と水。浸みこむ光と水。地から湧き上がる光と水。」

「日常の中に存在する身近な草木をモチーフとして絵画制作を行ったものである。自然に移りゆく形や色、静かにそっと存在する姿に興味を持ち、季節や時間とともに常に変化する植物の姿の断片を画面上で複雑に重ね合わせて描くとともに、制作の準備段階において自らがイメージしたものを組み合わせて、植物の姿を遡るような意識で表現することを試みた。」

Hitoshi Hashino　橋野仁史《織りなすもの》（2017）

Kishin Funada　船田奇岑《枝垂桜》（2018~2019）

「美を意識するということは、世界観、自然を意識することに他ならず、自然と調和した制作スタイルを晩年の指針にしました。…「環境を創造する」という命題は画業よりも上位の位置を占めます。これは、自然の中にある古民家にビルトインするための作品。建物や環境とともに熟成されていくことを期待しています。」

並木貴子《Earth Now》（2017）
Takako Namiki

「東日本大震災は日本全体を先の見えないものにしてしまった。今までにない大規模な災害が相継ぐ昨今、絵を描く者にとっては何をしたらいいのか。」

田川久美子《浮遊》（2018）
Kumiko Tagawa

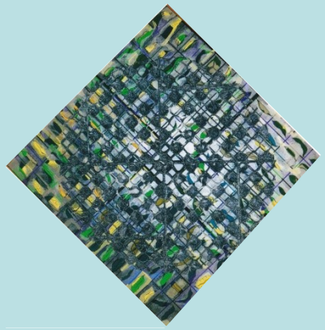
「自然に素直に飾ることなく描くという行為を大切にしたい。」

Hideaki Kochi　高地秀明《窓辺の風》（2013）

「古代ギリシアの彫像、鳥、花、草木、アンモナイトなど、異なる時空を生きたものたちを異時同図法のように描いた。人間と自然、それらの時間や空間について想いを巡らせた作品である。」

根木達展《生(き)一意動》（2014）
Satonobu Negi

「意動―心の考、形状を変える。」



千田禅《自然の実り·ヒトの稔り》（2019）
Shizuka Chida

「人間は自然の一部と考えています。しかし、人間は自然を征服しようとがんばります。無理なことなのに。普通に考えて自然の実りと人間・ヒトの稔りを自分なりの表現で比べてみたいと考えています。」

広田和典《フレコンバック(富岡駅前)》（2018）
Kazunori Hirota

「福島富岡駅前に野積みされたフレキシブルコンテナバック（除染された土・草等を入れる袋）、2015年3月当時、0・3シーベルトでした。美しい富岡の浜は、人は帰らず、除染袋や処理工場になっています。元住民の方々の苦悩を表現したい。」

薮野圭一《モシカシテ ヒト ソレトモ シゼン》（2019）
Keiichi Yabuno

「人間も自然の一部ではなかろうか。特に人間は自然の恩恵を受けて生きている。自然は人間の関与を必要としている。」

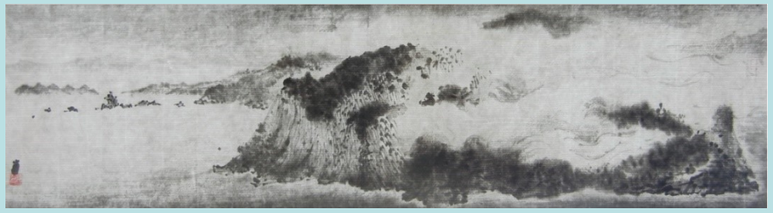
Hiroyuki Saida　才田博之　*参考作品

「地震、雷、火事、おやじ、噴火、火砕流、火山弾、溶岩流、火山泥流、竜巻、台風、林野火災、落石、土石流、斜面崩壊、地盤沈下、浸水、陥没、落盤、浸食、豪雨、洪水、氾濫、鉄砲水、高潮・・・自然災害（ディザスター）、自然現象（ハザード）、人災、公害など。人間と自然の関係は、繋がり、未知に富み、豊かな表情を見せる。自然と人間の営みは・・・つづく。」

Tsuyoshi Shiinoki　椎木剛　*参考作品

「自然への畏敬を忘れた人間。今、改めて「人」とは何かを書の世界から探っていきたい。」

「近世以来自然に対する観念の変化により、人は自然を破壊して、だんだん人自身にまで来ている。今回展覧会のテーマを切っ掛けに、古典山水絵の中に提示した自然の偉大さと精神性を再確認しようと思い、瀬戸内海の美しい風景を墨絵で試したのです。」



Fan Shuru　范叔如　*参考作品